

トロツキー／ベルクマン／スミルガ
ソコリニコフ／スミルノフ／フルンゼン／ターセラ
藤本和貴夫―赤衛隊から赤軍へ

赤軍の形成

鹿砦社

トロツキーノベルクマンノスミルガ
ソコリニコラノスミルノフルンゼンゲーセラ
藤本和貴夫ノ赤衛隊から赤軍へ

赤軍の形成

鹿砦社

赤軍の形成 目次

序・社会主義赤軍の創設——H・ベルクマン

労働者＝農民赤軍の組織にかんする布告 63

ロシア共産党（ボ）第八回大会 67

ソコリニコフの報告 69

ヴェ・スミルノフの副報告 83

軍隊創設におけるわれわれの政策／トロツキー 93

軍隊の建設——スミルガ 109

ロシア共産党（ボ）第九回大会 143

「民兵制度への移行」にかんする報告／トロツキー 145
民兵制度への移行にかんするテーゼ／トロツキー 166

ロシア共産党（ボ）第一〇回大会 171

軍事問題にかんする決議 173

労農赤軍の再組織化／エム・グーセフ、エム・フルンゼ 181

赤衛隊から赤軍へ——藤本和貴夫 193

〔一〕 帝國主義軍隊の瓦解

I ツァーリ軍

あらゆる時代、あらゆる国で、軍は統治・支配階級の道具であつて、支配階級の利害と利得とを守り防衛すべく定められている。これはいかなる闘争、いかなる敵が問題なのであらうとも、その如何を問わないのであつて、外部の敵すなわち他の諸国家、あるいは内部の敵すなわち従属させられた被抑圧階級が問題であらうと、右の点に関しては、このことは不変である。ちやうど、軍隊の大砲・小銃・機関銃等々が戦闘において道具の役を果たすのと同様に、軍隊自体が国家権力の闘争遂行手段である。国家権力は、自らを支えるためにも、国家権力の存立によつて自分らの利益を保障されている。住民層を支えるためにも、等しくこの手段を利用する。射撃手は、銃が操作しやすく、あまり重過ぎない時、つまり、銃の各部品が正しく組立てられ、銃床尾と銃床とが人間の肉体の体格・成長・体力に適合している場合のみ、的を射つてあらう。これと同様のことが軍隊の戦闘能力についても成立つており、軍隊が果敢に闘い勝利を取めるのは、それが一国の精神に適合し、外部にたいしても内部においても、あらゆる共同的關係と、そして、その時々々の国家の全機構とを反映している場合に限られる。これに反して、軍隊の中に比較的重大な変化が生起し、しかも国家機構は以前そのままである場

合、あるいは逆に、国家機構が変化を遂げていて他方は不変のままである場合には、軍隊に混乱が生じるのは避けられず、軍隊は部分的あるいは全面的にその戦闘遂行力を喪失し、分解に直面する。とは言え、通常、軍隊は一国と運命をともにするものである。

軍隊は一国の鏡である、とある偉大な軍指導者が述べたことがある。それでも、軍隊の構造が国家のそれに照応するだけでは十分ではない。一定の水準に達するためには、軍隊は目的意識的でなければならぬ。すなわち、何のために、いかなる目的で、いかなる利害・利得のために、殺害されたり負傷させられたり不具者になる危険を冒すのかを、どの兵士も判然・明瞭に識っておらねばならない。また戦闘目的が現実不重要であって、生命を賭し、日々の労働、すなわち、工場や農耕地における日々の糧のための努力を中断し、家庭と家族とを見捨てること、自分にとって、為すに値することである、との認識が必要である。しかるに、兵士への教化が徹底していなかったり、兵士にとって戦争目的が疎遠なものである場合には、当然彼は、不承不承自分の意志に反して、兵役につき戦いに赴く。彼がそうするのは、戦争を利益とする人間たちが、暴力をもって彼を強制するからであるに過ぎない。どの帝国主義軍隊でも事情はかかるものであるが、ツァーリ軍隊においても同然であった。

革命前の帝制ロシアでは、他のブルジョア諸国と同様に、権力は抑圧・擄取階級のもとにあった。すなわち、貴族的大土地所有者、資本家的企業主、銀行支配主等の手中に権力は握られていた。人びとは、ツァーリと大土地所有者との恣意の下に苦しみ、憲兵の革鞭、カザークの笞、政治警察の下で呻吟していた。ここでは、他の諸国におけるのと同様、富者と徒食者とは蛆の如く脂ぎり、飽食して

制作中

赤軍の形成 ---

発行日
昭和47年3月25日 第一刷

著者
ベルクマン
ソコリニコフ
スミルノフ
スミルガ
トロツキー
ゲーセフ
フルンゼ

附論
藤本和貴夫

編訳者
革命軍事論研究会

定価
850円

発行者
天野洋一

発行所
株式会社鹿茸社 ©1972年
東京都千代田区神田駿河台3の1
郵便番号 101
電話 03-293-9821
振替東京 16266

印刷所
東洋印刷株式会社

訳者との了解により検印廃止
落丁・乱丁本はお取り替えいたします